

時を超えて、今ここに



↑「水の鼓動」の完成を祝い酒樽を木づちで割る関係者。左から、吉田誠地・御船町観光協会会長、木村元一・御船副町長、福味総一郎・御船町商工会長、藤村久・御船ライオンズクラブ前会長



↑個人所有の中庭と旧酒蔵には「水の鼓動」完成を祝い多くの地域住民が詰めかけた

←今も当時の面影をしのばせる旧酒蔵で御船の酒復活を祝う愛飲家たちに笑顔がこぼれる



←箱のパッケージが2種類作られた「水の鼓動」。左が竹田津純さんがデザイン。右が一般公募で採用された吉田絵美さん（熊本市）のデザイン

酒造りの夢をつなぐ

「水の鼓動」復活のニュースは、人から人へと瞬く間に広がっていった。

原酒祭り後、初回限定で製造した生原酒4合瓶（720ミリ）は、予約や町内の酒店で2千本を販売すると、約1か月で完売する人気を集めた。さらに7月、火入れ原酒（同）と、冷酒300ミリが販売さ

「酒造りのまち」への思いから、すべてが始まった。有志の情熱が人の心を動かした。ここにたどりつくまで、多くの壁が立ちはだかった。しかし、誰一人としてあきらめなかった。時代を超えて、新たな鼓動が今ここに、始まった――

誕生した「水の鼓動」

待ちわびた、その瞬間がやってきた――

3月21日、町内にある個人所有の旧酒蔵で開かれた「原酒祭り」には、愛飲家など約100人が詰めかけ、御船の酒復活を共に祝った。そして30数年の時を超えて蘇った日本酒「水の鼓動」の深い香りと、懐かしさを感じさせる味わいに酔いしれた。

御船酒プロジェクトの吉田誠地会長は、「田代地区力石や通潤酒造の協力で完成しました。御船の特産品として気軽に活用してもらえればうれし」と、期待を口にしました。一方、会場には参加者の

「菊の露や常薫を思い浮かべながら飲みました」「地元の人たちで地元の米や水を使って造ったことが一番の誇り。そして宝ではないでしょう」という声で溢れ、どれだけ多くの人がこの復活を待ち望んだのかが伺える。

藤村久さんは、「水の鼓動」は自分がつけた名前だったから感慨深かった。酒を飲んで誰かひっくり返るばいと話していたら、自分がひっくり返りましたよ。嬉しさから飲みすぎたのでしょいうね」と照れくさそうに振り返る。

春分を迎えたこの日。肌寒さの残る夜だったが、遅くまで祝宴は続いた。

酒は重要なことだった。そこで、この問題を解決するため一つの組織にたどりつく。

その組織が、有限責任事業組合「ドリーム・パッション」だった。観光協会や商工会、町で取り扱えない事業を引き受け、新たなまちおこしの流れをつくるための組合だ。酒造りの夢は、酒プロジェクトから「ドリーム・パッション」へとバトンが渡された。

先哲が造った酒は日本一

酒プロジェクトから、酒瓶のラベルと、箱のパッケージの製作依頼がきました。長年御船の地に住み、絵やデザインの専門知識があることから、復活のためにデザインを引き受けてもらえないかと。酒プロジェクトの復活への熱い思いが伝わってきました。

御船の先哲が造った酒は、日本一だったと聞いていました。デザインは、酒蔵、御船川の水の清らかさや、吉無田水源からわき出る水をイメージしました。吉無田水源には、何度も足を運んで、白壁の昔の思いをいろんな人から話として聞きました。文字は、日本の伝統的な書道体で、完成までに習字70枚ほど書きました。ラベルや箱のカラーは、白壁の発展的な色を使っています。



「水の鼓動」ラベルのデザインを手掛けた
たけ た つ じゆん
竹田津 純 さん
(辺田見・68歳)

Voice
3

酒造りの成功を商品開発に

御船には特産品や土産になるものが何もなく、「何かつくらんないかん」という気持ちがありました。そんなときふね両岸会から、酒プロジェクトの話が観光協会へきました。

酒造りは酒プロジェクトで多くの人に動いてもらい、皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。「水の鼓動」は評判と反響もよく、「御船の酒をよく造ってくれた」と喜んでもらえました。

「水の鼓動」は今後、ドリームパッションを中心にやってもらいます。観光協会では、今回の酒造りを成功例として、やればできるという強い思いで（取り組み）成功へつながると認識しました。ドリームパッションや町商工会と一緒に、新しい商品開発をやっていければと思います。



「水の鼓動」復活の舵取り役で
御船町観光協会会長
よしだ せいじ
吉田 誠地 さん
(木倉・67歳)

Voice
4